

2015年 司教年頭書簡 神の「貧しさ」を生きる

パート2

教区時報 2015年1月号

『2015年 司教年頭書簡 神の「貧しさ」を生きる パート2』 掲載

教区時報 2015年2月号 巻頭言

心の貧しい人は幸い

教皇フランシスコは、就任以来「貧しい人のための、貧しい教会になろう」と呼びかけている。この呼びかけに応じて、私たちも最も貧しい人の困難な状況を自分のものとし、貧しい人の原点から、教会の生きるべき霊性を見直そうというのが、今年の司教年頭書簡の内容と思われる。昨年の「物質的貧しさ」から、今年は「精神的、霊的貧しさ」という視点に立って「神の貧しさに生きる」ことが考察される。

貧しさの中で神により頼む（1）

この第一のタイトルで予想されることは、真の幸いは「神により頼む」ことにあるということであろう。では神により頼む人は、誰かと問うと、キリストの答えは、これである。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」（マタイ5・3）これは、新約の大憲章（福音の要約）ともいわれる「真福八端」の中のしかも第一（最も中心的、基本的、要）となる言葉である。

この山上の垂訓と呼ばれる八つの幸いは、信仰の故に貧しくされ、迫害された人々に向けて語られている（マタイ5・10）その悲惨な状態を司教は、深い共感をもって語っている。司教はこの幸いについて語られる主の思いを、次のように訳して語り、理解をうながす。「幸いだな（嘆詞）。（誰が？）それは心の貧しい人。（何故？）神（の国＝支配）は彼のものだから」となると。マタイはルカと違って、心の貧しい人という、この「心の」という言葉は「執着しない心」とか「霊において貧しい」とか「霊の貧しさを知る」と訳されるが、誤解の余地を残す。そこで年頭書簡は「神にのみより頼む」「神に全く信頼するしか知らない」という意味だと語り、これが肯定的な精神的貧しさだとも説明している。

「心の貧しい人は幸いである…」という言葉は、十戒の第一「私は唯一の主である、私のほかに神はない。あなた方は一切の偶像を拜んではならない（出エジプト20・4）と呼応する。なお、十戒は旧約の神の掟の大憲章であり、その第一戒 一律法の第一条（要）であることに心を留めよう。

「神の前に貧しい」「貧しさの中で神に出会う」「貧しさの中で神により頼む」ということは「神は全てであり、全ての源である」という奥義に私たちを招き、神の創造の御業の観想へと導く。人間の貧しさは、「何も持たない」とか「小さい」とか「無力だ」とかいうのではない。「神は全てであり」神なしには「生きられない」「存在しない」「無にすぎない」といった、人間の本質を啓すものである。この人間の本質的な貧しさの具体的な形を年頭書簡は、続く11の項目にわたって語っていく。

さて、「それ^でいいんだよ。それ^がいいんだよ。だって、あなたたちこそ、父なる神への信頼を持つことができるから」という言葉は、最も感動的な言葉だろうと思う。ただ、これを誤解されませんように。これは、貧しい人が、主よ私はあなたにお返ししたり、お捧げできる物は何もありません。この貧しい私をそのまま御前に置き、憐みを願うことしかできません、と叫ぶ人々に対しての言葉ということをお忘れなく。

(村上 透磨)

教区時報 2015年3月号 巻頭言

謙遜の恵みを聖霊に祈る (11)

今回、年頭書簡の最後のテーマを理解しようと試みる理由を説明したい。そのためには、年頭書簡の全体の構造を把握する必要がある。

まず、タイトルだけを抜き書きにしてみる。

序文、教皇フランシスコの呼びかけ

- ① 貧しさの中で神により頼む
- ② 自分の無力さに気づく
- ③ 自分を正当化しない
- ④ 貧しくなったキリストの豊かさに学ぶ
- ⑤ 見えない霊的な豊かさを分かち合う
- ⑥ より多く欲することをやめる
- ⑦ 受けるより与える
- ⑧ 不安を受けとめて生きる
- ⑨ 貧しい人のために生きる信仰
- ⑩ 他者と貧しさの中で一致する
- ⑪ 謙遜の恵みを聖霊に祈る

結び、マリアの模範と保護に委ねるとある。

これを私なりに分析してみると、次のようになる。

まず、①「貧しさ」と「神への信頼」

⑪「謙遜の恵み」と「聖霊に委ねる」が対応する。

次に、軸となるのが⑤と④。神の貧しさとは、霊(神)の豊かさ⑤即ち、キリストの豊かさ④である。

この神(父と子と聖霊)の豊かさを源泉として、

自分に関する貧しさ②③。

神に対する精神的貧しさ⑥⑦⑧。

他者が隣人となる関わり(特に貧しい人の隣人となる事によって表される)貧しさ⑨⑩となる。

こうして、「精神的、霊的貧しさ」という視点に立って「神の貧しさに生きる」とは、どういふことかを明らかにされていく。

さて、このような分析がゆるされるなら、先の「貧しさの中で神により頼む」ということのもう一つの意味が、明らかにされる。それは「謙遜な聖霊への委ね」である。

この場合、神の前における「貧しさ」と「謙遜」は、ほとんど同意であり「神により頼む」とは「聖霊に委ねる」ことに、他ならない。

次に「貧しさや謙遜」に「神や聖霊の働き」がどうであるかを考えてみよう(これは今年の年頭書簡の一貫するテーマと思われる)。それは、聖霊(神の働き)が人間を貧しく謙遜にさせるのか、それとも聖霊(の充満)は貧しく謙遜な人に報い、実りとして、与えられるものなのかという問いである(年頭書簡は聖霊の働きを貧しく謙遜な人への報い、実りとして見ているようである)。しかし、この真理を最後にもって来ると「貧しさの中で神により頼む」ことを可能にさせるのは、神の霊(神の計画(はからい))にあることに気付く、神は召された人(義とされた人、ご自分のものとされた人)を貧しくする。そして、そこで(貧しさの中で)「何が人を生かすのか」「神に生かされるとは何なのか」「誰があなたの真の唯一の神であり、主であるか」を知らせる。それを教えるのが、あの「荒れ野の試み」である。ここでは、このメッセージのポイントだけを指摘する。聖霊がイエスを荒れ野に押しやった。砂漠は、人が自分の無であること(貧しさの極み)を体験する場。そして、人が裸で神と対面(出会う)する場となる。その対面の中で人には三つのテストが待っている。「パンと富の誘惑」「力と権力による支配の誘惑」「偶像崇拜の誘惑」と呼ばれるものである。この三つの問い(テスト)は「塵にしかすぎなかった」アダム(人間)に問われる、神との関係を決定づける本質的な問いである。ここにこそ「神は全て」「人間は無(塵)」つまり「神の豊かさ」と「人間の貧しさの出会いの本質が語られる。そして、人間の「貧しさ」の本当の意味を知らせ、人間は神の息吹がなければ塵にすぎないという、人間の本質が現われて来る。即ち、人間はその「貧しさ」と「謙遜」さの極みにおいて、神の命と霊に出会う。

(村上 透磨)

貧しくなったキリストの豊かさに学ぶ (4)

3月号に記した分析に基づき、今回は、その核とも思われる(4)について考えてみます。この項のタイトルは、一見矛盾しているように見えます。貧しくなればなるほど、キリストは豊かになるというのですから。でも、よく読めば次のような意味なのでしょう。

「主は豊かであった(栄光にみちていた)のに自らの栄光を手放すことによって貧しくなられた、それは私たちを豊かにするためである」(二コリ 8・9) また「キリストの貧しさとは…自分を完全に無にする、自己奉仕による貧しさであり『豊かさ』とは、神と隣人への愛のために、自分を放棄することになります。自己を完全に所有という豊かさである」と言っています。

つまり、次のような意味なのでしょう。

キリストの真の貧しさとは「自分を無にするほどの謙虚さという完全な自己奉獻(愛)にある」ということなのでしょう。

もう一つ神と隣人のため自分を放棄するほど自分をささげて無化し無所有となり、神の恵みにみたまされて自分を完全に神のものとするという意味なのでしょう。

こうして「キリストの貧しさとは豊かさである」との結論になります。

真の謙遜を身につける方法は、キリストに学ぶよりほかはないことを教える聖書の箇所は「柔和で謙遜だから私に学びなさい」(マタイ 11・28 - 29)です。ここで「柔和で謙遜」とはどのような意味で言われているのでしょうか。つまり、マタイはこの箇所、どういう状況で誰に対して「柔和で謙遜」を語っているのでしょうか。まず、重荷とは人に背負いきれない重荷を背負わせる、律法学者ファリサイ人の義であり、他方キリストの「軛」とは軽く快い愛の掟(福音)なのです。この二つの軛の中で、主は私の「柔和で謙遜」を受け入れなさいと勧めます。心の貧しい人とは、迫害の中にあっても、神の前にへりくだる人のことであり、柔和とは迫害にあっても神の前にしなやかな竹のように、倒れず救いを求めて背を曲げる人という意味です。まさに、キリストは神の前にへりくだり、優しさとあたたかさ、手折られることのない信頼をもつ愛の人である。それはまさに、あの降誕の馬舟のイエスと十字架上の神の子キリストの栄光の輝きである。それはキリストの愛の謙虚さ貧しさの極みである。弟子はこのキリストの謙遜で柔和さを身に帯びて生きるものだというのです。

(村上 透磨)

見えない霊的な豊かさを分かち合う（5）

（4）がキリストの貧しさと豊かさについて、でしたので（5）は「霊」つまり「聖霊」の貧しさと豊かさについて語られていると思ったのですが、「霊の豊かさ」と「霊的な豊かさ（貧しさ）」とは少し違うのではないかと思いました。私たちが、自分が聖霊にみたされたと思う時につい陥る、おごり高ぶりが自分を偶像にしてしまう危険があると、自分に言い聞かせているからです。でも（4）と（5）を対応させながら読むのは、この年頭書簡を理解するのによい見方の一つとして、とらえていただけるかもしれません。

（4）に言われている事の大切な点は、御父の意志に従って自分を完全に無とする（謙遜）と自己奉獻（神への愛と隣人愛）がもたらす貧しさ（豊かさ）であると言っている点です。

続いて本項では、自ら貧しくなられた謙遜を学ぶ時「神と富に共に仕えることはできない」（マタイ6・24 ルカ16・13）両立はできないと断言されます。

「マンモン」というのは本来、自分に安定をもたらすものの意味のようですが、それが自分を神の前でひとかどの者に見せてくれるもの、富や名声や金銭への欲望などを指すようです。ところが、神と対立して使われる時には「富という偶像」になります。ここで少し自覚しておきたいのは、自分の徳や聖性や義や信心や善業でさえも、そして聖霊にみたされていると思ひ込むこと自体も、自分を偶像化する危険性があるということです。それを救ってくれるのは、ただ神の前における謙虚さだけだと思います。

ところで富を「マンモン」にしない道が一つあると言います。富への欲（テモテ6・10）を克服すること、その激しい戦いに勝つには「愛による分かち合いだけだ」というのです。「愛による分かち合い」ということばは、すぐに「愛の宴」である御ミサへと思いを馳せることになります。それにつけても「愛の秘跡」であるはずの聖体祭儀に集まったコリントの教会の人々の「乱れ」は、目を覆うべきものがあり、それを戒めるため貧しい人を軽んずることなく、愛の分かち合いを通して霊的に豊かな者となりなさいと、強く命じます。

ただし、1コリント11・19～22で言われている、貧しい人のパンの分かち合いは、感謝の祭儀の前に行われた愛の宴（アガペー）を指しているらしいのです。勿論、この愛の交わりが正しく行われて、はじめて感謝の祭儀の意義が生まれて来るということは間違いありません。

そして、更に物質的なものを愛をもって全ての人に分かち合うということは、見えない神の愛の霊的な豊かな恵みを分かち合うしるしだと語ります。

霊的な豊かさは見えない、それが見えるようになるためには、見えるもの、見える形を通して、愛によって分かち合うことだということです。こうして、物質的な物の愛の分かち合いは、霊的な恵みの分かち合いの場となります。

（村上 透磨）

自分の無力さに気づく（2）

年頭書簡の（2）と（3）により司教が語ろうとすることは「救い」即ち神の国、又は永遠の命を得るため、神の前に自分をどう置くかをいうことに外ならない。今回は、そのことについて考えてみたいと思います。

それは、「自分の無力さに気づく」というテーマです。永遠の救いに障害となるものは、地上の富や権威に依存(執着)する精神「時の体制に満足」する生き方にあります。それは富や権力をマンモン(偶像)とすることであり（5）それを克服する方法は、自分に見える物質的豊かさを、愛の心で分かち合うことだと答えます。この（2）では、アッシジの聖フランシスコの完全な財産と自分放棄を模範として語ります。しかし、それは自分の存在の全てが神に依存し、福音を忠実に従うためであると言うのです。これは自ら貧しくなり、貧しい人への愛に生かされたキリストに、倣うことであるとも言えます。

さて、私たちは、父なる神に全く依存することによって、救いを得ることになるのですが、それは神の前で人間は無力であり、貧しく無にすぎない（霊的貧困）に気づくためです。でも、よく注意しておきたいのは、貧しくなること、無力さに気づくこと、謙ることが目的ではなく、真に貧しくなった時に「神が全てとなられ、神の愛と霊が命となって、私たちをみたます」ということなのです。

ちなみに謙虚さとは、自分は何も出来ないものと自分を卑下し蔑むのではなく、神の前で「ありのままであること」「神をいつもまなざし、神を唯一の主としてあがめ生きること」にあることを、忘れてないでおきたいと思います。

真の謙虚さとは、主の栄光から目をそらさない、神を見る目の高さでもあると思えます。

なお、ここで引用される、マタイ 19・23～24（ルカ 18・24～27、マルコ 10・23～27）について、一言解説してみたいと思います。それは「金持ちが神の国に入るより、らくだが針の穴に入る方が易しい」という言葉です。この「ことわざ」を用いた教えに、金持ちの救いの難しさを感じた弟子たちに、主は「あなた方には理解しがたいが、神は何でもお出来になる、人間の常識からは不可能に見えても、神の全能と愛によれば全ては可能だと」その全能を愛に訴えます。

それから、「針の穴」という言葉は「狭い門から入れ」（ルカ 13・22）を連想させますが、これは、愛の道、奉獻の道、十字架の道……。

そして、この「らくだの針」の話の文脈からすると、この金持ちは、律法の教えを完全に守っている義人であり、しかも主は彼を慈しみ、まなざしながら言われた（マルコ 10・21）という言葉です。

私たちは教えをよく守るよい信者かも知れません。でも、そういう信者であるからこそ、主は愛をもって呼びかけたのであって、このエピソードは「掟を守る忠実さ」と「貧しくなること」を天秤にかけるのではなく、神の愛を知ったら何が起こるか、「神が全てとなる」と言いたいのです。掟を忠実に守るか、財産を捨てて神の前に貧しくなるかが問題ではなく、神の愛の招き、神の偉大さ、栄光を知れば、掟を守るか守らないか、貧しくなるかならない

かが、問題ではなくなる。無力であるかないかさえも……気にはかけない。

(村上透磨)

教区時報 2015年7月号 巻頭言

自分を正当化しない(3)

「自分を正当化する」という場合、自分は間違っているのに気づきながら、自分が正しいと主張するといった意味にとらえる事がよくあります。でも、そんな皮肉っぽいものではなく、ここでは、自分の間違いに気づかずに、自分の行いや考えや言葉が正しいと自惚れるような単純な意味で使われているのかもしれない。

ファリサイ人は、自分の偽善に気づかずに自分の行いや言葉や生き方、考え方を正しいと主張した。それだけならまだしも、他人を見下した。そこに問題があったようです。つまり、このような生き方は、自分を義とすることであり、自己満足した高慢な生き方です。彼らは神の助けを必要と思わず、自分の善業(と思うこと)が救いをもたらすと思っている。その生き方は、自分中心的な言い方であり肉の生き方。その結果、実は自分が殆ど神に等しい者のように、自分の力で全てが適う、ある種の偶像崇拜者になってしまう。そこでは当然、神のため、神の栄光のためと言いながら、神を忘れた生き方になっている。これは、義人がよく陥り易い落とし穴なのです。

これでは、本当に貧しく謙った者とはならない。それは、神への全幅の信頼を欠く状態であり、神を必要としない生き方になってしまう。

ところで、神であるキリストはこれとは全く違う生き方を、その託身と十字架の秘儀の中に表された。それを語るのが、キリスト賛歌と呼ばれるものです(フィリッピ2・5～11)。

これは、主の「無化の極み」「謙虚の極み」「貧しさの極み」「従順の極み」「授与(愛)の極み」を示す、キリストと御父の愛の賛歌でもあります。この賛歌を雨宮慧師は「へりくだる人」と言う講話の中で、その業が、御子と御父の共働であることを、この賛歌は巧みな文章構成で語っていると、次のように説明しておられる。

「イエスは自分自身を
空っぽにした」
「そして自分自身を
低くした」
「(神は彼を)極めて
高く上げた」
「(神は彼に)恵み深く
与えた」

即ち

限りなく貧しく謙るイエスを、神は限りなく高め豊かにされたというのです

これがキリストの受肉(御託身)と十字架(死と復活)の秘儀、即ち人がケノジス(無化と神化の業)と呼ぶキリストの愛の奥義を表すものなのです。なお、それはみな私たち人間のためだったことに注意しましょう。

では、このキリストと神の御心の奥義を知った、私たちに何がおこるのか。年頭書簡では、それを徴税人の祈り(ルカ 18・9 - 14)、やもめの賽銭(ルカ 21・1～9、マルコ 12・41～44)をあげて説き明かしています。それは、自分の罪深さ、無力さ、貧しさを認めて「主よ私を憐れんでください」と祈り、主の憐みに信頼し、よりすぎる事しか知らない信仰者の姿として描きます。

これが神の前における、本当の貧しく謙遜な人、つまり神に愛された神の人と呼ばれるキリスト者の姿ではないのか……。

霊性を究めるには、愛を究める事だと良くいわれますが、むしろ謙遜さにあるのではないかとさえ思われます。人は愛にみたされると、意外にも自分の行いに安心安住し、結局、自分の善業にほれ込んでしまい、自分が正しいのだと思い込んでしまう。

そんなおそれを、つい抱いてしまうのです。愛の業にはいつも謙虚さが、よりそってくれないと…愛は……。

(村上透磨)

教区時報 2015年8月号 巻頭言

より多く欲することをやめる (6)

この項目で語ろうとされていることは「人は自分本位に成功や快樂をもとめ、そのためにより多くを所有すること、それを偶像化して、自分が満たされたと錯覚して生きることは誤りである」ということではないかと思えます。そのことを教えるためまず、現代世界憲章 69 (地上の富は万人のものである)によって語ります。

「神は、地とそこにある、あらゆる物をすべての人、すべての民の使用に供したのであり、造られた良き物は、正義を導き手として、愛を同伴者として、すべてに同等の理由でもって影響を及ぼすように定めたのである」という箇所です。それをカトリック教会のカテキズムでは、財貨には「普遍的使用目的があり」、自分が正当に所有している物件を、自分のものとしてばかりではなく、共同のものとしても考えねばなりません。「……ある財貨を所有するということは、その所有者が神の摂理の管理者であり、手にした利益を他の人々と、まず、第一に隣人と分かち合うべきです」という言葉です。その思いは高鳴り、聖ヨハネ・クリズトモの、あのびっくりするような言葉を引用します。「自分の財産を貧しい人と分かち合わなければ、貧しい人々のものを盗むことになり、彼らの命を奪うことになる」というあの言葉です (カテキズム 2446)

人間の欲望は限りを知りません、するとますます経済的格差が、生まれるというのです。ではどうすれば良いのか、答えは「より多く欲することをやめること」これが、キリスト教的貧しさへの実践だと語り『老子』の言葉を引用します。老子は「無為自然」という「道」を説きました。「道」とは「天地より先に存在する、何か」であり、そこからすべてが生まれた、その「何か」なのだ、その「何か」の前にあって人間が取るべき生き方は「無為自然」つまり、その「何か」の前に、ありのまま、そのままであることだということです。これはキリスト教の聖者達が、へりくだり（謙遜）と言っている言葉に当たります。老子の言葉は「知足の教え」といわれるもので「足るを知るの足るは、常に足る」という教えです。その前に、次のようなことを言っているのだそうです。「欲望が多いことよりも大きな罪はなく、何かを手に入れようとするよりも大きな過失はなく、満足を知らないことよりも大きい災禍はない」そして、この知足の教え、つまり「満足することを知って満足することは、永遠に満足することなのだ」と、老子が否定したのは「無為自然」という「道」の原則から外れた人為的な欲望のことです。

人間は満ち足りた状態のままではとても難しい、次から次から欲望がとめどなくあふれてくるからだということです。精神的豊かさを求めることは大切ですが、まかり間違うとファリサイ人的な義の追求になってしまうことがある、ということは修得を志す者への戒めです。ではキリスト教的にはどう語るかと問うてみると、マタイ6・21の「あなたの宝のある所にあなたの心もある」という言葉です。人間にとって最高の「宝」をどこに置くかによって生き方が変わります。

神様が自分にとって一番の宝になるか、それとも、自分の中にもうひとりの神（マンモン）を造るのかです。マンモンとは、ただ「富」ではなく、神に敵対する偶像（神）のことです。偶像は富の奴隷、富を僕とする者でもあります。

先月、語られたことは、今月にも語られています。あえてその違いを指摘すれば、自分を義とすることの愚かさ、自分を偶像化する危うさです。今月は物を偶像化することによる所有欲が、物の奴隷にしてしまう人間の愚かさや哀れみです。それを救ってくれるのはやはり、神の前に「へりくだる」ことなのです。へりくだりとはどういうことなのか、先月も今月も考察しました。

今月の謙虚さは、神様の前にありのままそのままに生きる謙虚な生き方、それが神の前の貧しさだと、理解するのです。

けれど…………

(村上透磨)

受けるより与える (7)

人間は、富を持ち始めると、つい多くの物を持ちたくなる、不正な手段を使ってでも、獲得したくなる。だからその富への執着心を常に反省し闘わねばならないと (6) で述べたあと、獲得することに終始しないようにと勧めています。そして、「受けるより与える」とは自由な愛の行いと奉仕であって、その極みが十字架上の愛だと言っているのだと思います。

ただ素直に申しますと、ここに司教の高鳴る思いみたいなものがあって、それが、かえって難しい表現になっているようにも思えます。今年のテーマは、精神的靈的な貧しさ (神の貧しさ) とは一体何であり、どう生きたらよいのか、という事にあるのでしょうから、その思いを大切に私なりに解釈してみます。

まず、金持ちの青年がイエスのもとに来て、永遠の命を得るために何をすべきかと尋ねます。すると主は「持っている物を売って私に従いなさい」と言われます。「それを聞いて彼は悲しみながら去って行った」とあります (マルコ 10・17~22) その時主は、あなたに「欠けているものがある」と言われるのですが、その「欠け」とは何なのでしょう。主が「欠け」と思われたのは、「青年が永遠の命は、掟を忠実に守ることにあると知っていたとはいえ、富の執着まで捨てなければならないということ、受け入れることが出来なかったこと」に、あるのではないのでしょうか。でも、問題は物への執着を断つということでは、福音を「生きる」ことには、ならないというのです。ここで「永遠のいのち」と比較されているのは何かといえば、神の国であり、「持ち物を売る」ことではなく「従う」ことにあると思うのです。一切を捨て富の執着を断つということは、その「従い」の結果なのではないのでしょうか。そうでないとこの呼びかけは、道徳的なメッセージに終わり、「すべきか、すべきでないか」「したいか、したくないか」のレベルで終わってしまう。それでは超自然的な愛の領域、十字架上の奉仕に開花する、イエスが約束する永遠の命 (神の救い) を得るまでには、至らないということに、なるのではないのでしょうか。

さて、ここでの「高山右近の靈性とイグナチオの靈操」という言葉が飛び込んで来ます。高山右近の殉教の精神は、あのイグナチオの靈操に培われたものだと、知っている者には少し分かりますが……また、イグナチオの靈操ということも、よく理解できない人もいます。キリストの心を悟るには、祈りと黙想と観想によることは確かです。ともあれ司教が引用なさっている靈操の 98 を見てみますと「……御身へのより大いなる奉仕と讚美となることのみ願い、あらゆる罵詈雑言と全き清貧と心の貧しさと實際上の貧しさを堪え忍び、御身に倣い奉る決意です」とあり。146 で靈的清貧には、三つの階があると述べられています。

第一は、富に対する清貧の段階

第二は、世俗的名誉に関する辱めと蔑みの段階

第三は、傲慢に対する謙遜の段階

この段階から、他の全ての善徳に導き入れるのであると言います。

147、我々の貴婦人との対話。つまり、マリアがその清貧の模範であると言おうとしているのでしょう。こういうことを言って年頭書簡は、幼子のように神と国を受け継ぐようにな

ることに高山右近は魅力を感じており、この精神から「殉教者は生まれた」とも言っています。最後に「受けるより与える方が幸い（使徒言行録 20・35）とのパウロの言葉を引用して終わります。このパウロの言葉は次のように解釈する事も出来ます。「私はエフェソの教会からたくさんの物質的・精神的援助を受けたことを、本当に感謝している。しかし、私にはもっと大きな喜びがある、それは神の救いと恵み、神の福音を与えることができる喜びを感じていることである。」この読み方は、読み込み過ぎていると言われるかもしれません。しかし、この読み方には、私が多く与えることが出来るとしたら、それは全て神から、そして、あなた方から、教会から受けた恵みによるのです。私の豊かさは、神と人々の愛の豊かさによるのだという、謙遜な感謝と讃美の言葉となります。これが、自分の命までもささげて行く愛の奉獻となり、また、そこにこそ、神の貧しさに生きることの神秘が、隠されていることになるのと思うのです。

何度も言うようですが、本当の奉獻、自分を無にするまでの奉獻を可能にするのは、人間の側の犠牲的精神や愛の奉獻心からではなくて、神の栄光、偉大さ、愛、恵みやその魅力にとらわれて、はじめて可能になるということです。それは、神の無条件の「理由(わけ)なしの無償の愛」によるということをお憶えておきたいと思えます。

なお、年頭書簡の各テーマの最後に述べられている、司教の呼びかけを大切にしたいと思えます。
(村上透磨)

教区時報 2015年10月号 巻頭言

不安を受けとめて生きる（8）

人は、人生に不安がなければ幸せだと思っているようです。では、不安はどこからくるのでしょうか、その不安は「何かを持たないこと」その「欠け」にこだわる、思い煩うことから来る。では、その「欠け」（欠乏、貧しさ）はどんなものがあるのだろう。それには「物質的貧しさ」と「精神的貧しさ」があるという。どちらかが奪われても人は不安になるが、その両方が奪われるとき人は、単なる不安だけでなく、絶望感さえ感じるかも知れない。これこそ貧しくされている人の悲しみや痛みかも知れない。とはいえ人は生きている限り、多かれ少なかれ、何らかの不安の中にある。そのようなとき人は、その不安に対抗するために、様々な態度を取ろうとする。不安を恐れ、無感覚になってみたり、それを取り除こうとか、未然に防ごうとか。……しかし、そのような時、キリスト者なら、不安を一掃することだけ考えるのではなく、不安をそのまま受け入れて生きる道があると考え、不安を気にするより、正しく評価するはずだと語ります。

ところで、不安を正しく評価して「受け入れる」か「受け入れない」の別れ目は、神の摂理、つまり「神の愛のはからい」「神の思いとその力ある御手」を信じるか信じないかにかかって来ます。

キリスト者の強みは、この神の愛の御手、その摂理を信じることにあるのではないかと気付かせます。

そこで、浮かんで来るのは、あの（マタイ 6・25～34）の摂理についての教えです。この箇所は、神に信頼する者は、生きるために必要な物質的欠乏（貧しさ）への不安や恐れ、思い煩いなどに、とらわれなくてよいと教えている箇所ですが、ここに見落としてはならないことがある。それは、不安に陥らなくてすむには、たんに富に執着せず、離脱の精神を持つだけでは、不安は十分には解決しない。それを配慮してくださる神への信頼心を持つべきだという点です。それにまた「物質的経済的支えが不安を取り除く」とも言っていないことに留意することです。物の「有る無し」、物への「執着心か離脱か」によって、不安が取り除かれるというよりも、神への信頼が、不安を取り除くと強調していることです。

詩人イエスが「空の鳥、野の百合、髪の毛一本のことを思え、案ずるな、私(かみ)がいるではないか」と語りながら、不安を取り除くのは神であり、神への信仰があり、神の御摂理なのだ。神への信仰こそが不安を取り除き、希望と喜びを生み出すのだと言っているのです。

マザーテレサの笑顔は、小さな一人ひとりを愛してやまない神の愛とそのまなざし、神の御顔を見つめることによるものでした。

それは聖女が貧しい人の中で、自分も貧しくなりながら、不安に陥ることなく、常に笑顔を持って愛の証しをなされた理由でした。

神の愛とその御摂理への絶対的信頼が、聖女と貧しい人々に福音の喜びを伝えたのでした。

愛と信頼を持って全てを受けとめようと願っています。

（村上 透磨）

教区時報 2015 年 11 月号 巻頭言

貧しい人のために生きる信仰（9）

「貧しさを選ぶ」

「貧しい生き方を選ぶ」

「貧しい人を優先する」

この三つの表現は同じように見えて「貧しさ」に対して全く異なった態度を表しています。

旧約聖書の神は「貧しさを選ぶ神」というより「反貧困の神である」と言わねばならないと言います。（反貧困の神－旧約聖書神学入門、ノルベルト・ローフィンク 著／大宮有博 訳、キリスト新聞社）神が貧しい人に共観を持たれるのは反貧困の神だからです。

「貧しい生き方を選ぶ」とは、奉献生活者が愛の完全な奉獻のしるしとして生きる貧しさです。（人は「清貧」の誓願と呼びます）

「貧しい人を優先する」とは、全てのキリスト者の根本的な生き方であることを、あのナザレの説教（ルカ 4・18～21）をはじめ、全福音書を通して教えていることです。

さて年頭書簡は、貧しく生きることの価値を見出せなくなった現代の物質主義、快樂主義、自己中心主義的な不信仰の時代を憂い「貧しい人のために生きる信仰」を呼び起こすように勧告します。それに打ち勝った方法として、荒野での誘惑を戦うイエスに目を向けます、

そこには神のみ言葉、神のみ旨を選び取るための絶え間ない戦いがあります。この戦いこそまさに神の貧しさに生きることであったと語ります。

この大きな挑戦で大切なことは、「貧しくあるという選択が、真にイエスに従うことによるのですが、そうなるためには、それが貧しい人のための選択であるかどうかにかかっている」と言い、また教皇フランシスコも呼びかける貧しい教会になるためには「一人ひとりが貧しい人のために生きる信仰を求めなくてはならない」と語ります。つまり、この訴えの意味は「信仰は貧しい人のために、自分の教会も貧しくなって生きなければならない」ということなのでしょう。

ところで、この訴えに答える力（動機）はどこから生まれるのかなと考えてみます。それは貧しい人への単なる同情では生まれて来ない、この根底に全てを与え尽して自ら貧しくなられたキリストの愛（二コリント8・9）、自らを無化することさえ辞さない神の愛がある。自分の命さえ惜しまない御子の愛がある、聖霊の愛がある。神と人間を結ぶ、全歴史はまさにこの神の愛と謙りによる出会いの歴史なのです。

この神の側からの「あふれ」と理解しなければ、神の前に貧しくなるという意味が解らないだろう。この神の「あふれ」を知ったものだけが、その自分の「欠け」に気づき、その「欠け」を「みたすもの」を体験する。そしてそれが「愛」を生み、互いの「欠け」を補い（分かち）合い、共観するもの、共有するものとなれるというのです。

もう一つ主が、私の後に従いたいなら、全てを捨て（ルカ18・28～30）命までも捨て（ルカ9・23）何も持たずに（ルカ9・1～6）貧しい者とならねばなりません。しかし本当にそのようになれるのは、見出したもの（キリストの国、命、救い、愛、等……）全てにすばらしく圧倒されてのことなのです。

「貧しくなること、無になること、無一物になること」が目的なのではない、ただそれは、神の命、愛、恵みが満たされるため、神の全く新しい創造（神にとっては遊びであり祈りである）に委ねるために他ならない。

もう一つ荒れ野の誘惑についての言及があります。そこでは世の富で誘惑するサタンの試みに勝つ方法としての「み言葉」の力について語っていますが、そこに働く聖霊のことを、私は楽しく想いかべています。聖霊は神の前に貧しくされた人を通して働く。「聖霊はイエスを荒れ野に追いやり……（ルカ4・1）とあり。また、ナザレの説教は、「主の霊が、私の上におられる……主が私をお遣わしになられたのは、貧しい者によいおとずれを伝え……恵みの羊を知らせるためである」とある。

聖霊は、人を貧しくする、貧しくして神に出会わせる……そして人は、聖霊にみたされ……神をアッバと呼ぶ、人はもはや奴隷ではなく、御身を共に、御父の子と共に、相続人とされた。

（村上透磨）

他者と貧しさの中で一致する (10)

「貧しい人のために生きる」ということは、人道的な立場からも、宗教的な立場からも、心ある人なら誰でも、そう言いますし、そう言わなければ、かえって非難されるようになって来た感さえあるこの頃です。でも少し気になることもあります。それは「のために」(英語では for) という言葉です。「のために」ではなく、「と共に」あるいは「の中で」あるいはまた「側によりそって」と訳すべきではないかと、思われるからです。「そんなことを配慮」してでしょうか、今月取り上げる「他者と貧しさの中で一致する (10)」というテーマが語られています。それを留意してこのテーマを読んでみます。

初めの言葉は少し解りにくい言葉です。たぶん人間の「人となり」は「何を持っているか」ではなく、「その人がどんな姿(生き方)をしているか」によります、という意味なのでしょう。さらに「その人が与えるものがその人自身を表す」というのも、その与えるものが、たんに「物」であったら「与える者と与えられる者」との間に優劣が生まれ、持っている者(力ある者)と持たない者(低い者、弱い者)との差別が生まれ、平等や一致は生まれて来ない、と言います。

では、どうすれば良いのか。ここで、ちょっとびっくりする言葉が飛び込んできます。

与える物が何もなくても、自分自身を与えることができるではないか、与えるもののないものどうし(貧しい人)が、自分自身を与え合えば「与える人」と「与えられるもの」が差別なく一致出来るではないか。共に貧しいという相互の自覚が、人間の間に一致を生み出すというのです。さて、このような一致が初代教会中に実現していた(使徒言行録2・44~45)と言います。それはたんなる理想ではなく、少なくとも「出来た」と自信を与え励ますのです。

年頭書簡は、初代教会の信者たちのこの模範を通して呼びかけています。

『物質的貧しさを一人ではなく、兄弟姉妹の共同体において、各自が自発的に選び取る時、その生き方の実りとして、霊的な貧しさが共同体で共有されることとなります。反対に、霊的な貧しさがともなわない物質的な貧しさも、個人にとっても、共同体にとっても、意味がありません。貧しい人のための教会になるために、修道者の共同体も、小教区の共同体も、自発的な貧しさという福音的貧しさを、それぞれの意思で選び続けていきましょう。』

さて、「中で一つになる」ということは、教会が神秘的であることを表しています。ところで共同体を語る時、人道的な共同体では「貧しい人を中心に一つになる」ということでしょうか。キリスト者として語る時「キリストを中心に」という視点を忘れてはならないでしょう。そこで、体の一致について語る「エフェソ4章・1節~16節」を黙想してはいかがでしょうか。「ギリシャ語本文での1節~6節」では「中で」が5回もくり返され、キリスト者がある中で生きるべき場を描き、後半「ギリシャ語本文での7節~16節」は「その中へ」が7回、向かうべき目標が書かれています。こうして、この「中で」と「中へ」を結ぶ所に、真の一致があるのです。この中心は勿論、キリストご自身です。これは「キリストに、キリストによって、キリストの中に、キリストと共に、聖霊の交わりの中で、全能の神に」とい

う栄唱の中に告白されます。こうして「貧しい人の中で、貧しい人の中へ」ということは「キリストの中で、キリストの中へ」ということになります。この告白をみごとに表したのが、キリスト賛歌（フィリッピ2・5～11）やロゴス賛歌（ヨハネ1・1～18）といわれるものです。

「貧しい人々の優先」というとき、時々この原点が欠けることがあります。神の愛や隣人愛について語るときも、この視点が欠けます。驚くなかれ、祈りや信仰について語るときもそうなのです。

最後に、マリアについて。教皇も司教も、その教書が終わるときは、いつもマリアに言及します。イエスの母、私たちの母、マリアはいつも私たちの模範です。マリアの心を知りたいければ、あの「マニフィカト（マリアの賛歌）」を黙想することです。

今年の年頭書簡の解説を終わります。でも、この「マニフィカト」の本当の意味を黙想し、自分のものにしない限り、今年のテーマは完結しません。

(村上 透磨)